京都大学文学研究科　グローバル COE　「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

学会発表渡航支援報告書

（ふりがな） 氏　　名	はまの　たけし 濱　野　　健	所属・職名 GCOE 研究員（短時間勤務）
発 表 題 名 （英　　語）	Migrant Women's Structural Differences: Reconsidering International Parental Child Abduction	
著　者　名	Takeshi Hamano	
会　議　名 （英　　語）	The 19th Biennial Conference of the Asian Studies Association of Australia	
開催地（国、市）	The University of Western Sydney, Parramatta, NSW, Australia	
参 加 期 間	2012 年　7 月　11 日　　～　　7 月　13 日	

オーストラリアアジア学会は隔年で国際学会を実施しており、今回は 19 回目の開催にあたる。アジア学会は、日本学会・東南アジア学会・南アジア学会などを傘下に持つ、オーストラリアのアジア研究においてもっとも大規模な全国組織である。本年度の学会のテーマは'Knowing Asia: Asian Studies in an Asian Century'であった。成長・拡大を続けるアジアと関係を位置づけることは、地政学的にも経済的にもオーストラリアの将来を見据えるためにも極めて重要な課題であり、その重要性は現在ますます高まりつつある。

初日の基調講演では、国立シンガポール大学の Lily Kong 教授が、従来の冷戦構造の中で構築された北米を中心としたアジア地域研究に代わり、アジアの中から新しい研究・教育プログラムを構築すること、更にはダイナミック地域研究の視点を導入することの重要性を訴えた。そこでは insider/outsider として、欧米で研究や教育実績を持ちながらもアジアを拠点とした調査・研究を実施するアジアの研究者による新しいアジア研究のビジョンが示された。質疑応答では、オーストラリアにおけるアジア研究について、講演内容にふれながら、アジアに隣接する一方、グローバルな研究・教育拠点として位置づけられるオーストラリアへの期待が示された。三日目の基調講演では、次年度刊行予定の内閣府によるアジア政策白書の作成に関わった Ken Henry 教授などによる講演が実施され、これからの新しいアジアの時代におけるオーストラリアの政治的・経済的・文化的なビジョンが提示された。

二日目の午後に実施された自身のセッションは'Post-migration' issues in contemporary Japan: Exploring a Global Society in the Asia-Pacific Region というタイトルで実施された。このテーマについては、同セッション報告者の舟木紳助氏（福井県立大学）およびマリオ・ロペズ氏（京都大学）両名との長期間の協議により決定されたものである。個別報告では、ロペズが北部九州でのフィールドワークに基づく日比国際結婚夫婦の長期的な関係性の構築の中で、宗教および信仰の重要性についての報告を行った。日本国内での外交人定住問題について、従来のエスニシティ・人種・ジェンダーなどの視点に加えた宗教という新たな視点の重要性が主張された。舟木は、福井県での自身の事例研究を取り上げ、外国人永住者の子どもたが、地域住民への参加を促しつつ、ICT を利用した映像プロジェクトを共同制作することにより、従来の社会福祉領域における外国人

学会発表渡航支援報告書

定住支援のあり方に加えた、新しい地域コミュニティの構築の可能性について言及した。最後に濱野は、現在マスコミなどで頻繁に取り上げられている日本人女性の国際離婚後の子どもの連れ去り（子どもを連れての日本への帰国）について報告した。ハーグ条約の批准や民法の改正といった法的整備に留まらず、移民女性が移住先で潜在的に抱える社会的格差を明らかにし、こうした格差が離婚後の子連れでの帰国にどのように繋がるのかを、国際レベルでの社会学的に明らかにする必要があると訴えた。その後の質疑応答では、こうした事例についての具体的な件数を明らかにする必要があること、自身がそうした国際結婚を経験している当事者からの視点などが言及された。更に、こうした問題が日本人女性に特有の問題ではなく、移民女性一般に共通する問題となることも確認された。また、現地のエスニック・コミュニティによるシングルマザーとなった移民女性の支援の可能性などについても議論が交わされた。

写真 1；Lily Kong 教授による基調講演の様子。

学会発表渡航支援報告書

写真２：濱野による報告の様子。